

知のプラットフォーム「クエスト」主催

高校生  
対象

# 人文学プレ・ゼミナール

## 大学の知、覗いてみませんか。

大学でなにを学びたいのか？ 大学になにを望むのか？

その明確なビジョンが、いっそう求められる時代となりました。

気鋭の研究者たちが、あなたの「知りたい」をサポートします。

2023年春期 全四講座

哲学 宗教学 歴史学 比較文化学

大学での講義・ゼミ形式授業を一足先に体験！

有名大学の名誉教授や研究者が、あなたの「調べる」「発表する」を丁寧に指導します。

総合選抜型入試、推薦入試にも繋がる！

双方向的な探求によって、大学入学後も生きるアカデミックスキルを育成します。

**日程** 2023年2月19日（日）3月5日（日）19日（日）4月2日（日）（全四日間）

**会場** 早稲田奉仕園 セミナーハウス (<https://www.hoshien.or.jp/map/>)

東京メトロ東西線早稲田駅徒歩5分／副都心線西早稲田駅徒歩8分

**対象** 高校一年生・二年生・三年生（中学生応相談）

各講座とも最小開講人数4名、定員8名（応募者多数の場合先着順となります）



受講のお申し込みはこちら <https://quidest.jp/pre-semi/>

講座詳細・参加費用・タイムスケジュールは裏面をご覧ください。

QUID  
EST  
SAPIENTIA

事前説明会（参加無料）

2023年1月20日（金）19:30～20:30

※zoomによるオンライン開催。接続方法および詳細については上記弊社HPをご覧ください。

「大学での勉強は、特に人文学では高校までのそれとは大きく異なっています。人文学とはどんなものなのか、人文学の研究の楽しさはどこにあるのか、これを機会に高校生みなさんにぜひ学んでいただいて、将来の人文学を担う若い人たちがこのクエスト・プレゼミから生まれることを期待しています！」

京都大学教授／NPO法人国立人文研究所（KUNILABO）代表・大河内泰樹

## ケースのプレ・ゼミとは？

高校までの授業では、教えられることを覚え、学ぶことが中心となりますが、大学では自らテーマを設定し、調査・研究を行っていくことが求められるようになります。

ゼミ形式の授業では指導教員と学生が一定のテーマのもと、発表や質疑、討論を行うことになります。また、教員が専門知識について話す講義形式の授業においても、最終的な成績評価の方法がレポートの場合も多く、自分で問いをたて、文献を読み、文章にまとめることが求められます。

近年、探究型授業など学生が主体的に調査や議論を行う形式の授業や講座が増えつつありますが、人文学分野についてのゼミ形式の授業や講座はまだ一般的ではありません。理由はいくつかありますが、ゼミで指導出来るような専門家が限られていることもその一つでしょう。

ケースのプレ・ゼミ講座では、名誉教授や博士号を持つ研究者といったそれぞれの分野の専門家が、入門的な講義を行った上で、研究テーマの設定や資料の探し方、発表、レポートの執筆について丁寧にサポートします。それにより、上位大学の総合型選抜入試やAO入試などにも対応しうる、ハイレベルなアカデミックスキルの修得と育成を目指します。

高校で学ばなければいけない範囲の外には広大な知の世界が広がっています。その入り口に、このプレ・ゼミ講座で触れてみませんか？

## 開講講座案内

### ● 哲学講座

#### 「哲学入門——「時間」について考える」

講師：峰尾公也（みねおきみなり）

現在、立教大学・明治大学・国際医療福祉大学・鎌倉女子大学非常勤講師。専門は、マルティン・ハイデガーの哲学を中心とした、現代ドイツ・フランス哲学の時間論と歴史論。著書に『ハイデガーと時間性の哲学——根源・派生・媒介』（溪水社、2019年）、翻訳にアルフォンス・ド・ヴァーレンス『マルティン・ハイデガーの哲学』（月曜社、2020年）など。

講座概要：

本講座では、受講者ひとりひとりが、自分自身にとって関心のある事柄を哲学的に思考し、発表やレポートといった形で言語化できるようにするために、とくに「時間」というテーマに的を絞って授業を行ないます。

「時間」には少なくとも、人間の存在とは無関係に持続すると考えられる「客観的時間」と、人間の存在と結びつかざりて持続すると考えられる「主観的時間」との二種類があり、どちらを本質的な時間とみなすか（あるいはどちらも本質的でないとみなすか）という点で、古来、哲学ではさまざまな議論が交わされてきました。たとえば、私たちは、すべての人間が唯一同一の客観的な時間のなかにおり、この時間は全人類が滅んだ後も持続するだろうと考えることもできれば、時間は各々人に特有の主観的なものにすぎず、ある人間が存在しなくなれば、その人間に特有の時間も持続しなくなるだろうと考えることもできます。

このように「時間」と一口に言ってもその内容はさまざまであり、「時間」について哲学的に思考するには、その内容を包括的に吟味しつつ、みずからの見解を論理的かつ批判的に彫琢していく必要があります。そこで本講座では、受講者ひとりひとりが、「時間」にかぎらずあらゆるテーマに応用可能な哲学的思考のための基本的なノウハウを身につけることで、自分自身で哲学的に思考できるようになることを一緒に目指していきたいと思えます。

各回の概要：

- 第1回：受講生の自己紹介、入門講義、参考文献リスト配布と解説
- 第2回：入門講義、各受講者の発表イメージ聴取と助言
- 第3回：受講者による文献紹介
- 第4回：受講者による本発表と相互質疑および講評

### ● 宗教学講座

#### 「日本人は（なぜ）無宗教なのか」

講師：鶴岡賀雄（つるおかよしお）

1952年生まれ。東京大学文学部卒業。同大学院博士課程修了。博士(文学)。東京大学名誉教授。清泉女子大学、立正大学、立教大学、上智大学、岡山大学、非常勤講師。専門：宗教学、西洋宗教思想。

講座概要：

日本でも海外でも、宗教にまつわる問題が世間をにぎわしている。政治と宗教の関係もなかなか奥が深そうだ。科学技術がこれほど発展した時代に、人はなぜ宗教から離れられないのか——この疑問は多くの日本

人が自然に持つ問いだろう。

しかし、そもそも「宗教」とは何だろうか。多くの日本人は、正面からこうした問いを問う機会がないままに生きている。そして「自分は無宗教だ」、とばくぜんと思っている人が大半である。

それでも、たいていの日本人は、お正月には初詣に行っておみくじを買うし、お墓参りも（ときどき）するし、ハロウィンやクリスマスは定番になっている。合格祈願の絵馬を買ったこともある(?)。パワースポットや占いはいくらじゃない。大都会にも田舎の村にも、ちょっと歩けばお寺や神社があって、お祭りをやっている。そういえば、幼稚園から高校まで（大学も）、ミッション系や仏教系がとても多い。そこではお祈りの時間があつたりして、そこから宗教に興味をもつ人も少なくない。周りには〇〇教の信者の人もいる。神様や仏様、ご先祖さま、霊界とか死後の世界は、「ぜったいない」とも思えない——こんなふうに住んでいる現代の平均的な日本人は、それでも「無宗教」なのか？

一方、外国に行けば、宗教を信じるのが当たり前のところも多い。欧米でもアジアでもアフリカでも、宗教と社会は切り離せないのが実情だ。国際交流には、宗教についての知識と、自分なりの考えをもっておくことが必須である。日本でもイスラム教徒（「ムスリム」と言う）をよく見かけるようになった。彼・彼女たちは何を信じているのだろうか。

それとは別に、マザー・テレサやダライ・ラマは素晴らしい人だし、ほとんどの宗教は悪いものではないはずだ。宗教が説く神や仏、愛や悟り、深い智慧や自由な生き方、人生の究極の意義など、誰もが多かれ少なかれ真剣な関心をもっているはずである。

ところが、日本では、中学でも高校でも、宗教について教える授業がほとんどない（これには日本特有の事情があるのだが、改善すべきである）。この講座では、高校までの教育の欠落を補って、宗教とはそもそも何なのか、人間にとってどんな意義があるのかを考えるための基礎知識と、宗教について考え、宗教に関わるときの基本的な心構えを伝えたい。それによって、大学での学びへの橋渡しをしたい。自分で調べて発表してみることで、身につくことは多いはずだ。

各回の概要：

- 第1回：入門講義①：「宗教をどうとらえるか——基礎知識と視点」
  - ・参考文献リスト配布と解説
- 第2回：入門講義②：「宗教のいろいろ——世界と日本」
  - ・受講生の発表テーマ・使用文献などの相談
- 第3回：受講生による発表と相互討論（一回目）
  - ・講師によるコメントと補い
- 第4回：受講生による発表と相互討論（二回目）
  - ・総合討論とコメント
  - ・まとめの講義「大学で学んでほしいこと」

### ● 歴史学講座

#### 「人間学としての歴史学——中世ヨーロッパを題材に」

講師：後藤里菜（ごとうりな）

西洋中世史、霊性史、心性史を専門とするが女性史、ジェンダー研究をふくめ幅広い関心を持つ。一般信徒、女性を視野に入れた人間学とし

ての歴史学のあり方を模索中。近年の感情史研究の動向をふまえながら、神と人、人と人をつなぐものとしての中世の〈感情〉にも注目している。著書に、『(叫び)の中世—キリスト教世界における救い・罪・霊性—』(2021年9月、名古屋大学出版会)。現在、川村学園女子大学、立教大学、東海大学、共立女子大学、清泉女子大学、青山学院大学にて非常勤勤務。

#### 講座概要：

みなさんは歴史の勉強が好きですか。暗記は苦手だから嫌い、暗記が得意だから好き、と言った声が聞こえてくる気がします。あるいは、大学受験には出ないような戦国武将のマニアックなプロフィールには興味があるが、授業で学ぶ歴史は単調で好きではない、という人もいるかもしれません。

大学進学以降に研究してゆく歴史学において、後者のような個別の対象への深い関心はおおいに歓迎されます。また、歴史学の研究は決して暗記ではありません。もちろん、研究史上明らかな事実というものがあり、それを正確に把握することは必要ですが、歴史を紡いできたのはわれわれと同じ、ほかならぬ「人間」であるため、どの人文学よりも身近で、根底にあるものこそが歴史学です。その意味で、歴史学とは人間学であると私は思います。

この度、高校生のみなさんを対象にプレ・ゼミを開く機会をいただき、嬉しく思っています。私自身が専門としている中世ヨーロッパを入口としながら、人間学としての歴史学の面白さを知ってもらいつつ、限られた時間の中にはなりますが、自分なりのテーマを見つけて探究するための手助けを精一杯させてもらいたいと思います。

歴史を遡ればたいいそうであるように、中世には身分差というものがあり、基本的に農民の子は農民、騎士の子が騎士です。ですが、彼らがその不平等を不満に思っていたとは限りません。キリスト教世界であった中世ヨーロッパでは、その秩序じたい神の与えたものとみなされている節があり、たとえば色々な点で公の行動が制限されていた「女性」のうち、例外的に執筆活動をゆるされた人物（クリスティーヌ・ド・ピザンなど）であっても、秩序のありかた自体の変化や平等化を求めていたわけではないのが興味深い所です。

そのほか、中世キリスト教世界では動物や自然について、色について、空を飛ぶ動物のほうがより天に近いので尊いとか、赤が尊く、黄色は忌避すべきで、緑は両義的であるとか、さまざまな事柄に象徴的な意味が読み込まれていました。それは、特定の動物や色を可愛いと愛でたり、自然の美しさに感銘を受けて写真に撮るわれわれとは、また少し異なった感性・世界観かと思えます。

感感性や世界観にも目を向ける人間学としての歴史学の奥深さを体感する中で、知識や技術を学ぶだけでなく、人間としてよりよく生きることについて各自、考えを深めてもらえたら幸いです。

#### 各回の概要：

- 第1回：受講者の自己紹介、入門講義、参考文献リスト配布と解説  
入門講義①「人間学としての歴史学とは」
- 第2回：入門講義、各受講者の発表イメージ聴取と助言  
入門講義②「中世ヨーロッパの人間の世界観」
- 第3回：受講者による文献紹介
- 第4回：受講者による本発表と相互質疑および講評、全体への講評

### ● 比較文化学講座

#### 「大学で文化の研究をするために——比較文化学入門」

講師：藤井嘉章（ふじいよしあき）

はじめまして。プレ・ゼミ講座を担当させていただき藤井嘉章です。

私は大学生の頃、東京外国語大学で中国語を専攻していました。大学を卒業後、研究者を目指すために大学院へ進学したのを機に、日本古典

文学の研究へと移りました。もともと外国語が好きだったこともあり、日本古典を常に外国の視点から眺めるという姿勢を持って研究してきました。

特にアメリカの大学に留学していた時に出席した「比較文化」のゼミで、世界の文学作品や文化現象をお互いに比較し、共通する点や異なる点を見つけ出していく研究に触れ、改めて学問の楽しさを感じました。

みなさんが大学に入るのが楽しみになるようなプレゼミ講座にしたいと思います。

平和主義な性格ですので、安心して参加してください。

：東京外国語大学（「漢文入門」）、立教大学（「和歌講義」「漢文学講義」）、昭和女子大学（「日本古典文学講義」「アカデミック・ライティング」）

#### 講座概要：

これから大学を目指すみなさんに、大学ではどんな学びがあるのだろうか、そのために今できることはなんだろうか、そういった疑問に答えたいけるような知的好奇心に満ちた2ヶ月にしたいと思っています。

「比較文化学」と聞いて、分かるような分からないような感覚になるのではないのでしょうか。それもそのはずで、この学問は決まった対象（例えば日本古典文学の『源氏物語』のような対象）を持ちません。「文化」を「比較」という方法が学問の名前になっているのです。そのために扱う対象は、文学でも、社会制度でも、音楽やスポーツでも、なんでも構わないのです。

ただしひとつだけ約束があります。それは対象とする文化を、必ずそれとは別の文化と比べることで、多面的に分析するということです。

例えば私は中国に留学している時に受けた作文の授業で、与えられたテーマにとっても新鮮な驚きを覚えました。日本の教育であれば作文のテーマになるのは「少年法の是非」や「出生前診断」などについてあなたの意見を書きなさい、のように自分の立場を論理的に主張するものだと思います。中国の授業で課されたテーマは「勤勉」でした。「勤勉」が良いのは当たり前です。その上で、なぜ勤勉である必要があるのか、を例えば中国の偉人とされる孔子や、権威ある歴史書である『史記』などから文章を引用して説得的に書くことが求められたのです。

ここで日中の作文課題という比較文化的な視点が生まれます。どちらが良い悪いという判断をするではありません。なぜそのような「違い」が生まれるのか？ ふたつの「文化」を「比較」することで出てきた疑問を、それぞれの文化背景や歴史、政治状況や現在社会から求められている能力など、さまざまな視点から分析し、答えを導き出していきます。これが「比較文化学」という方法の醍醐味です。

このプレ・ゼミ講座では、このような物事の捉え方・考え方を身につけます。そのために自分でテーマを見つけ、必要な情報を探し整理して、その内容を発表し、最終的にまとまった分量の文章を書くという体験を全力でサポートします。

これから大学を目指すみなさんに、学問の楽しさ、大学で学ぶ楽しさを前もって経験してもらいます。そして希望を持って受験勉強や大学進学に向かって行く原動力にしてください。

#### 各回の概要：

- 第1回：入門講義「比較文化学とはなにか」
  - ・プレゼミの進め方・受講生の自己紹介・ゼミでの発表方法
  - ・参考文献リストの配布と解説
- 第2回：発表のモデルケースの提示・情報の集め方と整理の仕方
  - ・受講生のテーマと発表イメージの共有
- 第3回：〈比較文化の視点からテーマを選ぼう〉
  - ・受講生によるテーマ紹介
  - ・整理した情報を発表へとつなげるために
- 第4回：受講生による本発表と質疑応答
  - ・発表内容を文章にまとめていくために

時間割 比較文化学講座・哲学講座 10:30-12:40 / 宗教学講座 13:00-15:10 / 歴史学講座 15:30-17:40 (全日程共通)  
受講料 各講座5万円(宗教学講座のみ8万円)

# QUID EST SAPIENTIA

## ◇ ケス (QeS: Quid est Sapientia) について

ケスは名誉教授およびポストクを中心に哲学、宗教学、美学、文学、歴史学、言語学など人文学分野の「知の提供」を行う専門家集団です。調査・監修、執筆・翻訳、講義・顧問などをご依頼頂けます。詳細は弊社 HP (<https://quidest.jp/>) をご覧下さい。

お問い合わせ：info@quidest.jp

協力／株式会社 AaaS Bridge (<https://aaas-bridge.co.jp/>)

協賛／NPO 法人国立人文研究所 (KUNILABO) (<https://www.kuniken.org/>)